



銅山・ベンガラで栄えた吹屋の代表的な町家に入れる。

吹屋ふるさと村郷土館は弁柄業を営んでいた片山家が出した分家の一つ「角片山」で、出入口の板図に「島根県宮下、石見國那加郡、第1大区小拾六区、浅利村大工棟梁、島田綱吉、明治十二年卯三月三十日」とあるように石州(石見国。現:島根県西部)の宮大工を呼び寄せ5年の歳月をかけて1879年(明治12年)に完成した吹屋を代表する町家のひとつです。

その後1977年(昭和52年)に吹屋が重要伝統的建造物群保存地区に選定されたことをきっかけとして、1979年(昭和54年)に当時の当主から旧成羽町が借り、現在は郷土館として一般公開されています。

◆ 施設のおすすめ

吹屋は弁柄業で大変豊かで、「吹屋よいとこ金掘るところ、掘れば掘るほど金が出る。」と謡われたほどで、吹屋の町並みは山奥にもかかわらず、大勢の人でにぎわっていました。

屋根には職人を吹屋に呼び寄せた際に持ち込まれた赤褐色の石州瓦が葺かれ、主屋にはケヤキ材、クリ材、サクラ材が使われています。木材の表面には漆とベンガラが塗り込まれて、吹屋の町並みの特徴になっています。

それぞれの木材は、木組みという木と木に切込みを入れ嵌め合わせる宮大工の伝統的な技法が使われています。他にも隠し扉や隠し戸、からくり戸があり独特の雰囲気をもっています。

◆ 子どもたちへのメッセージ

建築の際に使った木材は20年乾燥させ、水分の抜けた木材を使っているので建ててからも組木がしっかりかみ合い高い耐久力を持っているので地震があってもビクともしませんでした。

建物や屋根、装飾など職人たちが持っていた高い技術と、ベンガラで栄えた当時の吹屋を感じ取ってもらえればと思います。



外観の様子



隠し戸棚



片山家で使われていた生活道具



赤褐色の石州瓦



からくり戸



廊下